

# 麗和 サッカークラブニュース

VOL.28

平成22年9月22日発行 発行人 麗和サッカークラブ会長 星野隆之

“ いろいろ報告です ”

会長 星野隆之

## ○総会報告

会則運営基準が一部下記のように修正（太字部分）されましたが、その他の協議事項は全て承認されたことをご報告申し上げます。お手元の資料をご訂正の上、保存方よろしく願いいたします。又、1名追加の監事、及び幹事の人選については役員会に一任されましたので、次のニュースでご報告いたします。

1 会員 (1) 会員 サッカー部出身者とする。

ただし、中途入会者はサッカー部在籍経験者に限り、役員会で承認し総会に報告する。

## ○おめでとうございます

浅見俊雄氏(高3回卒)が日本サッカー協会殿堂入りをされました。国際審判員をはじめとして、日本サッカー界・スポーツ界の発展に多大な貢献をされました。心からお祝い申し上げます。鈴木良三氏(浦和西)、落合弘氏(浦和市立)も殿堂入りされました。

「浦和四校サッカー部OB交流戦」懇親会で三氏にご出席いただき、ささやかな記念品を差し上げようと計画中です。多数の皆様の出席をお願いいたします。

## ●残念無念！ その1

「全国高校サッカー選手権埼玉県大会」順調に勝ち進んだ我が校は地区代表戦で強豪「大宮東高」と対戦。延長でも決着がつかずPK戦へもつれ込みましたが、県大会への出場を逃しました。「残念無念！」しかし、菊池前会長が常々言われていた「感動する試合」を見事に体現してくれました。不肖私は高校生年代の指導に長年携わってきましたが、一年間で個人、チームともにこんなに進歩した姿を見るのは経験がありません。先生方のご指導に対してはもちろんのこと、真面目に集中し、日々努力を重ねてきた生徒諸君に敬意を払いたいと思います。昨年とは才能ある選手が揃い、わくわくするサッカーを見せ、インターハイ予選では出場まであと一步のベスト4に進出してくれました。新チームにも大いなる期待をしたいと思います。

## ●残念無念！ その2

犬飼基昭氏が僅か1期2年で日本サッカー協会々長を辞任(?)されました。日本のサッカーが世界水準に追いつくために数々の改革を進めていた矢先で、「残念無念！」の極みです。そのお力が必要なときが必ずや来るものと確信しております。

## ●残念無念！ その3

会費の納入につきましては多くの皆様方にご協力いただき厚く感謝申し上げます。が、別紙の表のように「あと一步」ではなく「あと五歩」の状況です。このお知らせをしなければならぬのは「残念無念！」 よろしく願いいたします。



住所変更・会員消息・連絡等は  
下記アドレスへお願いします。  
連絡先アドレス 星野隆之  
takayuki40402002@yahoo.co.jp

## 「第10回 浦和四校サッカー部OB交流戦」

- 1 期 日 平成22年 10月24日(日)
- 2 会 場 さいたま市立 浦和高等学校(旧浦和市立高校)
- 3 集 合 8時00分
- 4 開会式 8時20分
- 5 試合開始 8時40分(当日組み合わせ決定)
- 6 殿堂入り三氏のお祝い会・表彰式・懇親会 13時30分

同校合宿所

※60歳以上チームのエキジビション有(市高女子サッカー部?)

※駐車場が少ないので相乗りでおいでください。

**35~49歳チーム 3連覇がかかっています!!**

## 高校選手権一次予選を終えて

サッカー部監督 松村道彦

去る8月20日より、今年度最後の公式戦である全国高校サッカー選手権埼玉県一次予選が開催されました。5月のインターハイ予選では支部大会で惨敗しました。その後は、昨年度の県大会ベスト8レベルの試合に出場機会のなかった今年の3年生18名ですが、昨年度以上の集中力、吸収力で日々の練習に励みました。その3年生に引っ張られながら2年生も力を付け、7月下旬のJヴィレッジでの合宿を経てこの夏にチーム力が急激にアップしました。

初戦は狭山清陵高校と対戦、3:0とリードしたところから終盤2点を失いヒヤリとしましたが最後に1点加点し4:2で勝利。続いて上尾高校と対戦、初戦の反省を生かし3:0で勝利しました。ブロック代表決定戦の相手はシード校の大宮東高。1月の練習試合では1:4と惨敗している相手ですが、ここまでの選手の伸びと、チャレンジ精神で恐れず思い切り闘えば充分やれると試合に臨みました。試合開始から積極的に動き、チームに「やれる」という空気がみなぎり、何度か決定機を作り出しました。ヒヤリとする場面もありましたが、チャンスは浦高の方が多くありました。0:0で延長戦でも決着がつかずPK戦となり、残念ながら3:4で惜敗しました。涙する選手を前に言葉に困りましたが、「谷間の世代」「谷底の世代」などときつい言葉で評価されてきた今年のチームが、ここまでできるようになったことは監督の私にとっては大きな驚きでした。ここで終わるのが本当に残念でした。これからもっと伸びる可能性を感じながら3年生全員と握手をし、解散しました。

酷暑の中応援して下さいましたOBの皆様には良い結果をお見せできなく、また報告できなく大変申し訳ありません。先般は星野OB会長よりOB会費から多大なる現役支援金をいただきました。併せてこの紙面をお借りして御礼申し上げます。今年のチームはリカバリープロテインを日常から取り入れることを申し出てくるなど意識も高く、費用はかなりかかりますが、この支援金を有効に使わせていただき、益々チーム力の向上に務めたいと考えます。

現在2年生32名、1年生33名、計65名で11月中旬から開催される新人大会に向けて準備を始めたところです。OB皆様の厳しくも暖かいご指導、今後ともよろしく願いいたします。

## 新主将となって

浦高サッカー部 主将 佐藤祐太郎

新しく浦高サッカー部主将になりました佐藤祐太郎です。自分たちの予想より早い先輩方の引退で、早めのスタートを迎えた私たち新チームですが、まずは冬の新人戦で南部支部大会ベスト7に入り関東大会予選への出場権を得るという目標に向けて日々練習に励んでいます。チームには先輩方の試合で出場させていただき活躍した選手が多くいますが、ベンチの外で応援・サポートに回っていたメンバーも、共にレギュラーの座を争いながら、お互い力を合わせて闘っていければと思っています。また目の前で見えてきた先輩方の良い点を学ぶだけでなく、改善すべき点からも学ぶことで、先輩方が築かれてきた伝統を守り、さらには超えていけるようなチームを目指していきたいと思っています。ご指導よろしく願いいたします。

## 「サッカーとビジネスの接点」

村井 満 (高校30回卒 リクルートエージェント代表取締役社長 Jリーグ理事)

1970年。今から40年前の日本では現在の中国・上海のように「大阪万博」が開催され、高度経済成長の真っただ中だった。私がまさに遊び盛りの小学校5年生だったその年に、TVアニメ「赤き血のイレブン」の放映が開始された。私はすぐさま主人公「玉井真吾」の虜になっていた。休み時間や放課後はクラスの仲間と「サブマリンシュート」に興じていたのだ。浦和の高校が舞台だと噂に聞き、単純な私は、いつか浦和でサッカーをやりたいものだと思っていた。私の出身は川越市の霞ヶ関、名前だけは立派だが、相当な田舎町。少年サッカーの組織があるわけでもなく、中学校にもサッカー部はなかった。バレーボールをサッカーボール代わりに蹴っていた私にとって浦和はあこがれの街だった。サッカーの環境がなかったので、小学校・中学校の頃は仕方なくミニバスやバスケット部に所属していた。念願かなって浦和のサッカー部に入部したものの、リフティングも出来ない、ボールのトラップも出来ないありさまだ。ただ、皆の後をボール拾いとしてついて行くだけだった。

当時、高校サッカーは王国浦和と静岡の全盛時代。私が1年生の時は高校選手権の埼玉予選で浦和は準決勝まで勝ち進み、赤き血のイレブンのモデル校、浦和南高に0-1で惜敗したが、その南高は全国を制覇した。全国大会を通して、南高にとって先輩諸氏が戦った浦和との一戦が一番ハードな試合だったと、ボール拾いの私にも分かった。私が2年生の時も浦和南は連覇。2年にわたり全国大会の決勝は、埼玉対静岡の対決だった。そんな両地域がプライドを賭けていた時代だ。私が、浦和1年の夏に静岡のサッカーフェスティバルに連れて行ってもらった。たまたまゴールキーパーが不在で私がやらされた。足の使い方は知らないが、手でボールを取るのはお手の物。そのままゴールキーパーになってしまった。持っていたトレーナーに近所のスポーツショップで1番のゼッケンをプリントしてもらい、即席のユニホームまで作ってしまった。このあたりが私のサッカーとの出会いだ。

社会に出て、就職や転職、人材開発や組織論をフィールドとするようになった。いつしかサッカーからは離れたが、心の中はいつもで素晴らしいサッカー人と仕事のできる職業人の共通性は心にとめていた。現場（ピッチ）に出たら上司（監督）は止められない。常に当事者意識を持つ判断力が必要だ。職場（ピッチ）では常に仲間とのコミュニケーション（アイコンタクト）の連携は欠かせないし、競合会社（ライバルチーム）を常に研究（スカウティング）するクールマインドと熱い闘争心は欠かせない。他にも、リーダーシップ、セルフコントロール力、イメージーション豊かな創造力、相手との駆け引きでのマリーシアなどなど。ビジネスで必要なものはすべてサッカーが教えてくれる。そんな思いでいるうちにJリーグのセカンドキャリアを支援するようになった。東大に入るよりもJリーガーになる方が難しい。そんなプロ選手がビジネスシーンで通用しないはずがない、と思ったからだ。また、小学校低学年の子供たちにとって、あこがれの職業の筆頭は今でもJリーガーやプロ野球選手だ。しかし、高学年になるにつれて、親たちは「夢みたくないことを言っていないで塾でも行きなさい。」と言い出す。サッカー選手の引退年齢は平均で25歳位いで、一生サッカーで食べていける人は限られる現実があるからだ。プロのサッカー選手の人生が実り豊かなものになって初めて「子供たちの夢」は現実のものとなる。そんな思いもあって側面からJリーグを支援し始めた。

現在は縁あってJリーグの理事としてその経営にあたっているが、そんな世界に関わりをもって改めてサッカー界における浦和の影響力を知った。サッカー協会の会長としてサッカー界の大改革のために体を張って貢献された犬飼基昭先輩を筆頭に、専務理事の田嶋幸三さんは南高が全国を制覇した時のキャプテンだ。現在のヴェルディの経営問題を検討しているうちに、私の現役時代の監督柴田宗宏先生がヴェルディの初代の選手兼コーチだったことを知った。今年の9月10日、日本サッカーミュージアムにて、「日本サッカー殿堂入りの式典」が行なわれたが、殿堂入りした浅見俊雄先輩は、元国際審判員で浦和高校出身。鈴木良三氏は、東京オリンピックの日本代表メンバーで浦和西高校出身、そして浦和レッズの落合 弘氏は市立浦和高校出身。現在は私の同期でキャプテンだった持田健生もレッズの幹部として頑張っている。こうした王国浦和の諸先輩の貢献は枚挙にいとまがない。

まだまだサッカー界は課題も多い。サポーターの高齢化、クラブ経営環境の悪化、いまだに遠い世界との実力の差、改革には待ったなしの状況だ。浦和で、そしてサッカーから学んだことを活かし、サッカー界の人作りを通して、少しでも恩返しをしたいと考えている。